

「古今問答」私見

秋 永 一 枝

一、はじめに

平安から鎌倉にかけての文学作品関係のうち、声点注記の最も古い例として次のものが考えられる。

教長の「古今集註」(京大図書館蔵本) (注1)

俊成の「古今問答」(天理大図書館蔵本)

顯昭の「拾遺抄注」(天理大図書館・書院部蔵本) (注2)

「散木集注」(天理大図書館蔵本) (注3)

教長の「古今集註」は、治承元年(一一七七)九月、御室仁和寺の守覚法親王の御前で講述したものとされているが、声点の記載があまりに少ない(教例)。勿論これは、仁治二年(一一四二)の写しであるから、原本の注記がこれより多いことも考えられないではないが、この時代の書写の慣習からいってほとんどありえないことのように思う。その上、声点の注記箇所がほとんど人名で、古今集において従来疑義のある箇所とは一致しない。

これは講述の際、守覚法親王が教長に「声」を尋ねられたのを書記が注記したものかもしれない。或いは、講述を書写した者が

心覚えに教長の「声」を注記したものかもしれない。もし教長が「声」を問われたとする。その場合、声点に関する知識が彼に相当あったとしたら、必ずやもっと多くの語に「声」が記されてあったと思う。また或いは、後に何者かが加えた「声」であるかもしれない。それ故この声点の記載を「声点本の萌芽」とみることに疑問が残る。

教長の「註」から六年後の寿永二年(一一八三)より、同じく守覚法親王は顯昭に命じて「拾遺抄注」以下、多くの書を注進せしめ、再び下し賜って「声」を差さしめている。声点本として重要な位置をしめる「古今集序注」は文治二年(一一八六)と建久二年(一一九二)に、「古今集注」は文治元年(一一八五)に「声」を差した旨識語がある。

顯昭本については別の機会に詳述するが、俊成の「古今問答」は、顯昭がおびただしく声点をつけはじめより以前の作品ではないかと思う。顯昭本をこの種の声点本の発生源とみるならば、「古今問答」は正しく萌芽段階といえるだろう。

「古今問答」の声点は極めて分明であり、その位置も正確であ

る。この声点は、当時のアクセント資料として重要なばかりでなく、歌学史からみても価値が高い。そこで「声点本」というプロフィールから報告してみたい。

二、資料の紹介

この「古今問答」は、天理大図書館蔵の二巻本によった。中院家・竹柏園旧蔵本である。上巻は序より巻十まで、中巻は巻十一より巻十六までで下巻を欠く。

これは、古今集の不審についてある人が質問したのに対し俊成が答えたもので、中巻の内題に「古今問答中問者^{中問者}答者^{答者}三位入道」とある。

「顕昭古今集注（天理大図書館蔵本。中院・竹柏園旧蔵本。二巻）」と同筆で、ともに消息の裏に書かれており、冊子を改装したものの。室町期の写本とされている。詳しくは、佐佐木信綱博士「国文学の文献学的研究（岩波版）^{岩波版}」及び「天理希書目録」を参照して頂きたい。内容に関してはいちいち紹介するまでもなく、「国語国文学研究史大成、古今集・新古今集」に翻刻されてあるので御覧頂きたい（声点責任筆者。近く久曾神昇氏も「日本歌学大系別巻三」に翻刻の予定と伺う。そこでもいざれ詳細な解題があるものと思うので、ここでは声点に関してのみ記すことにする。

声点は墨圈点。平声（左下）・上声（左上）の位置に、清音には一点、濁音には横に並べて二点記載されている。二、三の疑問はあるが、諸本と比較してきわめて位置が分明である。平安時代のアクセント資料として著名な「類聚名義抄」や、古今集関係の諸

本の声点と比較検討してみたが、諸説の異同はともかくとして、注記の「声（アクセント及び清濁など）」もまた正確であり、当時の京都アクセントを彷彿とさせる。これは、この書写本の善本たることの有力な裏付けの一つである。

声点記載の箇所は、後におけるように比較的多く、次のような場所に重点的に差されている。

1 当時既に古語になっていて、アクセントや清濁など、発音が不明であり、声点の注記がその解明に役立つような場合。

「。した。て。るひめ 如此可読歟」

「。あ。た。歟。あ。た。歟」

2 語義の弁別に声点の注記が役立つような場合。

a 解釈疑問のもの

「。こと。なら。は。 （如ならばか、異ならばか、殊ならばか不明のとき）

「。お。き。て。歟（置きてか？） お。き。て。歟（起きてか？）

b かけことばの語など朗読の場合、どちらの語を表面に出してよむべきか分らないようなもの。

「い。ね。歟（稲か？） 実心は。い。ね。歟（去ねか？）

「置く」と「起く」、「稲」と「去ね」、「流れ」と「滞かれ」など、声点の複刻はしてあってもそこに注記されたアクセントがどういうことを言おうとしているのか、どこに問題点があるのか分りにくい面もあるうかと思われるので、声点注記の部分のみをとりあげ、そこに簡単な補足を加えてみた。参考までに、比較的重要な古写本・古注釈書の声点もあげておいた。

三、声点注記一覧

ここに声点を記載した古写本・古注釈書は次の諸本である。
 「」内は省略名

- 「頭」 頭昭古今集序注（京都府立図書館蔵本）……………
- 「頭」 頭昭古今集注（天理大図書館蔵本）……………
- 「伏」 伏見宮家旧蔵頭昭奥書本……………
- 「家」 家隆本古今集（天理大図書館蔵本）……………
- 「高」 高松宮家本古今集（高松宮家蔵本、複製本あり）……………
- 「貞」 貞応二年本古今集（静嘉堂文庫・大東急文庫・京大図書館・天理大図書館蔵本など）……………
- 「寂」 寂恵本古今集（上巻書陵部蔵本、下巻上野家蔵本）……………
- 「昆」 下巻は複製本によった）……………
- 「昆」 毘沙門堂本古今集註（某家蔵本）……………

古今訓点抄（大島家蔵本。複製本によった）……………「訓」
 このほか、必要と思われるもののみ、観智院本類聚名義抄（複製本によった「名」の声点などを注記した。なお、古今集のアクセント論的諸問題に関しては別に報告する予定である。
 問の肩にあるへは合点で、俊成が可とした答のしるしである。
 一覧表では、スペースの関係上、左のような記号を用いた。
 （ ）で囲んだ部分……筆者の補注を示す。
 へで囲んだ部分……その部分に該当する諸本の声点を示す
 ○……へ内で、その箇所には声点の記載がないことを示す。○一個で一拍分。
 *……諸本のうち「古今問答」と異なる声点注記のもののみ記した。注記部分及び語彙の異なるものには示していない。

大観 番号	声点注記の部分、及び補注	諸本の声点
序	へ。した。て。るひめく 如此可読敷	「頭・寂」 上平平上上平 「家・高・貞・昆」 上平平上○○
序	へ。あ。ら。か。ねく 土地也	「頭」 上上上上 「家」 上上○○
序	へ。す。さ。の。の。み。こ。と。何神哉 人歎 す。さ。の。の。の字へ有無如何	「頭・寂」 平平平上上上上上 「伏・家」 ○○平上平○○○
序	へ。ち。の。り。ひ。ち。と。ハ泥也 塵地也	*「頭・寂」 上上上上 上上上上 「訓」 ○○上上上上 (両様の記載あり)
序	へ。そ。の。哥	「頭・高・貞」 平平○○ 「寂」 平平平平

121	97	95	95	82	序	序	序	序	序
〈い。ま。ま。か。も〉 <small>(今)</small>	花のさかりハ〈あり。な。めと〉 <small>(調)</small> あらんすれともいふ也	くれなはな〈な。けの〉トハ 花の影 <small>陰イ</small> やハなきと云心なり	春の山へにま。と。ひなん 迷敷	かたいとのへ。よりく 如クナラハト云也 <small>(註6)</small>	かたいとのへ。よりく	きのふは〈さ。かえ。お。り。て〉 <small>(調)</small>	き。な。ね。か。ひ。 <small>(調)</small>	〈花をそ。か〉 花をたつねなとする心也	〈お。ほ。ち。の。く。み。こ。と〉 <small>(調)</small> <small>(註5)</small>
「伏」平上平上平 「寂」〇〇平上平 「昆」〇〇〇上平	*「伏」〇〇上平調 「高・貞」〇〇〇上上平 「寂」〇〇上上平調 「昆」上上上上平 「訓」平上上上平調	「伏」平上平 「高・貞・寂・昆・訓」平上〇	「名」迷 <small>マドフ</small> は平調上上	*「伏」上上上上調 「貞・寂」上上上上調 去調平上上上調 如此也三条義也 <small>(調)</small> 上調は上の誤写ならん	「寂」上上〇〇	「顯」上上平上上平上 「伏・家」〇〇〇上上調 「訓」上上上上上平調	「伏・家」平上〇〇 「昆」〇上上上 「訓」〇〇平調上上イ也 楽也	*「顯・伏・家・寂」〇〇〇平上 「訓」〇〇上上平 遅也 「昆」〇〇〇〇平上 ウ也	*「顯」平上上平上平〇 「伏・家」平上上上平上平 「寂」平上上上平上平〇 「訓」平上上上上平〇

419	ひととせにたひきまます君へまゝてハ。やとかす人もあらし とそおもふ	「寂・毘」平上調 「名」待は 平上
417	ふたみのうら 何国哉 伊勢敷	
319	「たき」の声点不分明 (註)	「寂」上上上上 「毘・訓」上上上上 「名」澁は 上上 (「問答」の声点疑問のため*不明)
309	もゝていゝてなん	「訓」モチ・イナム 「名」持は 平上、出は 平上調
260	もゝる山 大和国也	
168	へかゝたへすしきトハ 片辺也	「毘・訓」平上上 「訓」エトヨムヘシ 「名」諸は 平上〇
160	へよゝたゝ 終夜之心也	「伏」平上上 「家」平上平 「寂」〇上平
151	こゑのへかゝり	「毘」平調平 「名」極は 平調平
150	へおゝりはへて トハ常ニナトいふ心也	「毘」平上〇〇〇 折
143	こひせらるへはた 将也 (「はた」の誤写か)	「毘」上上 将 マサニ (「問答」誤写なら合う) 「訓」上平
137	へうちのは 羽吹也	「寂」〇〇上調平
132	へはなつ。シ。よりかへりける 花つミテ帰也	「寂」〇〇平平〇〇 「毘」平平平上平 「訓」平平平上〇
121	橋のへこしまのくまとハ阿也	「伏」上上平〇上上 「毘」〇上上上上上 「名」限・曲は 上上

<p>422</p> <p>へうくひすとく<small>(清)</small>のミ鳥のなくらん <small>(註8)</small>「うくひす」の誤写ならん</p>	<p>426</p> <p>へあなうめ<small>目二世</small>に<small>(清)</small>つねなるへくも</p>	<p>427</p> <p>へか<small>(清)</small>に<small>(清)</small>くら<small>(清)</small>か<small>(清)</small>は<small>(清)</small>くらノ事歟 是ハ問也無答(後世の注) <small>(註8)</small></p>	<p>428</p> <p>へもの<small>(物)</small>はな<small>(清)</small>かめて<small>(清)</small>く 物はなかめて 如本 長目て思なり</p>	<p>435</p> <p>へく<small>(清)</small>た<small>(清)</small>に<small>(清)</small>く 草名也</p>	<p>443</p> <p>へけ<small>(清)</small>に<small>(清)</small>こ<small>(清)</small>く 牽牛子也</p>	<p>447</p> <p>へや<small>(清)</small>ま<small>(清)</small>し<small>(清)</small>く 虎杖ト申ニヤ <small>(註8)</small>「やまし」の誤写か</p>	<p>470</p> <p>へ<small>(置)</small>お<small>(置)</small>き<small>(置)</small>て<small>(置)</small>敷<small>(置)</small> お<small>(置)</small>き<small>(置)</small>て<small>(置)</small>敷<small>(置)</small> 置<small>(置)</small>て<small>(置)</small>を<small>(置)</small>起<small>(置)</small>て<small>(置)</small>と<small>(置)</small>よ<small>(置)</small>そ<small>(置)</small>ふ<small>(置)</small>る<small>(置)</small>なり<small>(置)</small>と<small>(置)</small>も<small>(置)</small>に<small>(置)</small>同<small>(置)</small>事<small>(置)</small>也</p>
<p>「伏・家」上平上○○ 「高・寂・貞」上平上平○ 「毘・訓」上平上平平 「名」鶯・黄鳥は平上平</p>	<p>「伏・家」平平上平上 「高・貞」○○上平○ 「寂」○平上平上 「毘」平平上平○</p>	<p>「伏」上上上○○○ 「寂」上上上○○○ 「毘」上上上上平、カムハ(両様注記) 「訓」上上上上平 「名」樺は上上平</p>	<p>「伏」○○○○平平上 「家」○○○○平上上 「訓」モノハカナメテ</p>	<p>「伏・家」平平上 「毘」クタムクタニ 「訓」平上上</p>	<p>「伏・寂」平上平平 「毘」平平上平 「訓」平上上上</p>	<p>「教長註」平上平 「毘」平上上 「寂・訓」平上平 「名」児草は平上平</p>	<p>* 「毘」平上上 置キテハ起キテニソヘタリ(合点を正とすれば異なる。)</p>

<p>628</p> <p>。な。と。り。か。ハ 如此歎 大河歎</p>	<p>591</p> <p>冬川のうへはこほれる <small>(濁)</small> なか。れて 流歎。な。かれ。 滯歎 愚案両様不分明 猶流ト被存歎</p>	<p>556</p> <p>へ。し。も。つ。い。も。も。て。ら。く。 <small>(濁)</small> 如此歎</p>	<p>550</p> <p>あはゆきのたまればへ。か。て。 <small>(濁)</small> かに <small>(濁)</small> か。て。なるへし</p>	<p>540</p> <p>心かへへする物にも。<small>(清)</small>か する事にてあれなと云詞歎 しかなり</p>	<p>493</p> <p>へたきつせの中にもよとハ 滝ニよとある事如何、よとミのある哉 されバ滝ニハあらず。た。き。つ。瀬也 <small>(註)</small></p>	<p>491</p> <p>山した水のかくれて 山した水たきるへからず如何 山下水ハいつとなくたきりゆくを木ニかくれてせきかぬと也 此水滝ニハあらずた。ハやくゆくを。<small>(濁)</small>た。き。つ。と申也<small>(註)</small></p>	<p>479</p> <p>へ花つ。ミ。しける時<small>(濁)</small> 何事哉</p>
		<p>* 「伏・家」上上上平上平調 <small>上調</small> 「毘」○○○平上平調</p> <p>* 「寂」○○○○○上調平 <small>上調</small> 「訓」上上上平上上平調</p>	<p>* 「高・寂」平上○ (俊世の答を正とすれば合う) <small>上調</small> 「毘」上上上 カテト云者カタクコホル事也</p>	<p>* 「毘」上上平上平調 <small>上調</small> 「訓」上上平上平調 <small>書後部本古今清濁口送下</small> かなの心也 ヨミ曲清</p>	<p>「訓」上上平上平調</p>	<p>へたきつころく…… <small>上調</small> 「毘」上上上○○○ <small>上調</small> 「訓」上上上○○○ 「問答」は終止形、 これは連体形による異なり</p>	<p>「寂」○○○平上平上平上上上 <small>上調</small> 「訓」上上上平上平上上上 <small>上調</small> 「毘」上上上平上平上平上上上</p>

<p>652</p> <p>むらさきのへねすりゝのころも <small>業ハ以根染色敷</small> しかなり <small>(通)</small> ね。す。り。か 根すりといふ事也</p>	<p>*「毘」上○○</p>
<p>677</p> <p>へみち。の。くの。あさかのぬまの花かつみかつみる人にこひ やわたらん <small>(。の)は誤写ならん</small></p>	<p>「毘」上平平上上 (*か否か不明)</p>
<p>690</p> <p><small>(清)</small> い。さ。よ。ひ。敷 とハなと申哉 何夜哉 <small>(通)</small> い。さ。よ。ひ。 十六日月也 <small>(。)</small> (当時既に清濁不明か)</p>	<p>へいさよひのく……………*「毘」上調平平上 *「訓」平調上上上 「パジエス日仏」Izayoiwotsuki イザヨイヲツキ</p>
<p>691</p> <p>いさこんといひしハかりになか月のありあけの月をまちいてつ るかな <small>イテツルカナ</small> ま。ち。て。つる 月ヲ待出ツルト云敷</p>	<p>「毘」マ：チイ：テツ：ルカナ</p>
<p>696</p> <p>つ。の。く。に。の。へ。な。に。は。お。も。は。す。山。し。ろ。の。と。ハ。に。あ。ひ。み。ん。事。を。の み。こ。そ <small>(名)</small> な。に。は。名ニハ——也 <small>(難)</small> つ。の。く。に。の。な。に。ハ。お。も。ハ。す。山。し。ろ。の。と。は。に。あ。ひ。み。ん。こ。そ を。の。み。こ。そ <small>カタシトナリ</small> 難ニト云ナリ <small>ナニニハナリ</small></p>	<p>*「寂・訓」上平上 「毘」平上上 ナニハ思ハスト云者名ハカリニ不思ト云ヲ 難波ニソエタリ</p>
<p>696</p> <p><small>(清)</small> と。は。と。は。と。は。と。は。 とハ何様なる心詞哉 雖為鳥羽猶如此説敷 山城のとハ、とくあひみんと云也と云々</p>	<p>へとははく……………*「寂」○○調○ *「訓」上調平 *「毘」上調上 トハト者常也ソレヲ鳥羽ニソヘタリ (合点を正とすればすべて異なる)</p>

<p>829</p> <p>みつまさりなはかへりへくる。か。に。 如此敷 くるかにとはいかなる詞哉 こむといふなるみちまかふかに をなし事也 さあるばかり とやうにいふ也</p>	<p>803</p> <p>秋のたのへいねてふこともかけなくになにをうしとか人のか るらん い。ね敷 実心は。い。ね。敷 (補) (遣)</p>	<p>771</p> <p>へおもひくらしのねをのみそなく おも。ひ。く。ら。し。敷 思くらす ひくらしに寄敷 しかなり輝によそへたる也</p>	<p>746</p> <p>かたみこそいまはへあたなれ (遣) (仇) (遣) (能) (註6) あ。た。敷。あ。た。敷 (註6)</p> <p>() の写し落しか</p>	<p>702</p> <p>あつき弓へひきのつゝらすゑつめにわかおもふ人に (コトノ事也) へひのしけん つゝらすゑつめとハ如何 (註) ツ。ラ 如此敷 つゝらハ鞭などにする物也</p>	<p>699</p> <p>みよしのおほかハへの藤浪のなみにおもはわかこひめ やは (遣) 。なみ。敷とハ如何 なみくといふ心也</p>
<p>「伏・毘」○○上上 「寂」○上上上 「訓」平上上上</p>	<p>*「寂」平上 (合点を正とすれば異なる) 「名」^{イネ} 稱は 平上 行は ^{イネ} 上平</p>	<p>*「寂」○○○上上上 「訓」平上上上上上</p>	<p>「寂」上上○○ 「訓」上平○○ 「毘」上平平 「名」^{アタフク} 怨・敵などすべて上上。この類は「万葉」布美安多之(4238) 「平家正節」及び「バジェス日仏」Ata アタ、Atacataki アタカタキと清音。江戸以後濁音か。(*)か否か疑問)</p>	<p>「寂」上上上上上平上 「家」上上○○平上 平上 「毘」平上平平○○○ 「訓」上上平平○○○ 「名」^{ツツラ} 黒葛は 平上上</p>	<p>*「伏」フチナ・ミノナ・ミニ (遣) へなみに……「寂」上平○ 「訓」上平平 愚心也 「毘」上平上 等閑ニ思ハハコヒシト云也</p>

四、予とは？

三の「声点注記一覧」にあげたように、声点注記の箇所は諸本が全くばらばらの位置に注記してあるというようなものではない。「古今問答」に「声」の注記があつて「一覧」にあげた諸本に注記のないのは五例である。但し、諸本何れにも注記のある「やまとうた(せ)」とか「袖ひちて(せ)」をりければ(せ)というようなものに注記のない例が多くみられる。普通、古今集の声点注記の最少限度の箇所は大体定まつているものである。その最少限度の箇所に、各識者が声点の注記をプラスしてゆく場合がほとんどである。更に流派とか相伝とかがやかましくなるにつれ、流派によって注記の箇所が画一化してくる。ところが、「古今問答」とか、「顯昭本」「家隆本」とかいう初期のものは、比較的好き勝手な箇所に注記している。これは声点注記の萌芽期・発生期の特徴といふべきであらう。もっとも「古今問答」は、質問者が不明の部分を買問しているのであるから、質問者「予」が伝授をする立場でなければ尚のこと流派とは関係がない。言いかえれば、「古今問答」における声点注記の系統が相伝され、書写されなかつたことから考へて、質問者は歌道の師ではないということにもなる。では予とは誰であらうか？

佐佐木博士はこう言われる。

「俊成の他の書とひとしく、問に対する答であつて、自発的の著述ではないのであるが、問者予とあり、答者三位入道とあるのを見れば、問者は相当に位の高かつた人ではなからうか。しかも

問者の問は全体を通覽するに、可成り外面的な浅いことが多いので、したがつてそれに対する俊成の答も、決して深いといふわけにはゆかない」と。

相当位の高かつた人であらうことは、問答のはしから想像される。この「予」については、橋井清五郎氏の「後京極良経」説がある。「万時五条殿御消息」(書陵部蔵本)は、万葉集撰述の年代について後京極良経の問に対して藤原俊成が答えたものであるが、その複製本(貴重圖書影本刊行会)の解説に次のようにある。

「更に憶測を進めるならば、良経は古今集に就いても俊成に質問した事があるやうに思はれる。即ち竹柏園に所蔵する古今問答二卷(第三卷欠)は、『問者予、答者三位入道』とあり、答者が俊成であることは明かであるが、問者は不明であり、内容を調査しても果して何人の問とも判明しないが、全体的な風体から見ると良経ではないかと思はれる」と。

たびたびうように、問者の声点に関する意識は相当に高い。そしてこれは問答状である。予が問状を出し、俊成が答を書いて奉る。声点に関する問の多いこと、470「おき。て敷 お。きて敷」などのように二様の声点を注記して質問していることなどから、ここに記された声点のほとんどは、質問者が注記した(書記に注記させた)ものと考へてよい。俊成が新たに声点を注記したと考へられるのは、493・550・690・696の答、四例ほどである。勿論、声点に関する問に対して合点(○)をしている。序の「し。した。て。る。ひめ」にへがあるのも、「その発音でよし」という解答であらう。470で「おき。て」の方にへがあるのも、「置きて、の

発音でよめ」という俊成の答と思う。ところが、解答のないものが多くみられる。76の「あた敷。あた敷」のような阿棟注記の疑問に答のないものさえあるのはどう考へるべきか。「高砂ハ播州也」のところに「此字虫食不見 若根敷 但又播敷 可勘ヘンハカリ如何オ」と後注があるところから、この親本は相当虫損していたことがわかる。それで、答のないのは虫損のための落ちか、この写本の写し落しか、俊成が答えなかったものか、その三様が考えられる。だが、問答状の性質及び別に「愚案阿棟不明」などがあるので、俊成が全く問に答えないとすることは考えられない。写し落しによるものが多いのではなからうか。しかしながら俊成は、語を「声」によって弁別することはできても、上声だからどうか、平声だからどうかという、いわば語学的なこととは全くの苦手であつたらしい。だからこそ、「六百番陳状」の「かひや」の条にみられるように、その声点知識をもつてして、^(註10) 頭昭は俊成への攻撃手段としていたのである。それ故、声点に関する答は自分の任ではないとして避けたということも考えられないではない。

教長―俊成―頭昭、とこう考えてきた線にきわだつて浮かびあがつてきた人、御室の守覚法親王を、わたしは「予」の有力な候補者の一人としてあげたい。俊成は治承二年の夏、仰せによつて「長秋詠草」を守覚法親王に進覧しているが、これも傍証の一つとならう。

守覚法親王については、橋本進吉博士「法橋頭昭の著書と守覚法親王」に詳しい。^(註11) これによると「親王は多能な御方であつて御

著作も少なくない。仏道に於て覚性法親王や覚成僧正、源運僧都等について広沢・小野両流の奥秘を究め、沢見鈔、沢鈔、野月鈔、野決鈔其他多くの書を編著せられたが、声明や管絃の道にも通ぜられ、之に関する御著述もあり、御筆跡も美しく殊に梵字に巧であつた。和歌を嗜まれた事も勿論であつて、毎月風雅の土を召して歌会を催され」たのである。「声明」はあくセントを反映しているものであり、譜は節博士でしるされる。法親王が声明に明るいということは、音感も発達し、あくセントに関する認識も深かつたであらうことを示す。また、仏典には古くより四声の注記がみられるので、或いはこれらからも知識を得られたかもしれない。^(註12)

そこでこういうことが考えられはしないか。

さきに触れたように、法親王は教長を召して古今集の講義をきかれた。その際或いは声点に関しても御下問があつたかもしれない。しかしたとえ質問があつたとしても、教長は一向にはかばかしい答をしなかつたと思う。また法親王は俊成に古今集の疑義について問状を出された際、声点についても質問された。ところが俊成もまた、比較的文学的な答しか申し上げず、法親王の探求心を満足させてはくれなかつた。こうしてできたのが「古今問答」だと考えたい。その後、法親王は頭昭に命じて「拾遺抄注」以下、多くの注釈書を注進せしめた。そこでおそらくいろいろと御下問があつたに違いない。頭昭は声点に関する相当の知識があつた。そこで改めて法親王は「声を差す」ことを頭昭に命じたのではなからうか。そこで頭昭の「差声」作業が口火を切られたのではなからうか。ねっからの文学者で「声」など文学的価値なし、と無関

心な態度をとった俊成と、語学者顯昭との対照がここからもうかがわれるように思われる。古今集など、文学作品に注記された声点は、アクセント・清濁など発音を示すための本来の形から、声点によって語義を弁別させるという新しい面に応用され発展してゆく。「古今問答」は特にその傾向が著しく、以後の声点注記に大きな影響を及ぼすものである。

五、おわり に

これより後「差声」作業は、広い意味での古今伝授と密接な関連をもつようになり、いよいよ複雑な機相を呈してくる。そして「声を差す」ことの本質から遠ざかり、声点の意義が全く消失した場合でも、伝授の精神の中には生きてきたのである。「差声」作業の発生・展開・衰微は、文学史、特に伝授史の重要な部門を占めている。法親王のアクセントに対する興味が動機となつてきたに「古今問答」をつくり、更にまた顯昭の膨大な声点本に結実し、法親王の意志が広く長く生きつづける。そのように考えてくると、平安の末から江戸時代まで綿々と続く「差声」作業のみなもととして、守覚法親王の存在をもっと高く評価してよいのではなからうか。

(これは昭和三十四年六月の国語学会で発表したものの一部である。
岡一男・伊地知鉄男両先生の御教示を得たことを明記したい)

注1 二冊。複製本(貴重図書影本刊行会)・翻刻(日本古典全集、古今和歌集)あり。

本記云

治承元年九月十二日調教長入道受訓説訖

仁治二年卯月廿六日書写訖

(卷十六の奥書に)

本記云

治承元年九月廿三日相遇教長入道沙汰了

仁治二年七月廿三日於燈下亥尅計書写了

注2 一冊。旧竹柏園藏本。「新校群書類従」(13卷、卷29)に翻刻あり。次の奥書がある。

寿永二年五月八日依仰注進之大棟除奥義抄哥其後又下預差声畢

顯昭

建久元年七月廿二日奉授二品大王了

顯昭

弘安五年三月六日一校了

侍従雅有

注3 一冊。「新校群書類従」(13卷、卷29)に翻刻あり。次の奥書がある。

寿永二年十月七日奉梁^マ口^マ教命注進之

重下給差声了

顯昭

長流

注4 右以顯昭自筆本写效尤秘藏々々

西下経一「伝本の研究29」211頁「古今和歌集(岩波大系)解説70頁」参照。吉沢義則「複製本解説」または「日

本古典全集解説「飛鳥井雅縁自筆の「諸雜記」(国語国文昭24・10~11)、伊藤寿一「藤原教長の筆跡に就て」(画説32) 参考。

注5 大野晋氏によれば上代「鶴鶴」は娑弊岐・佐邪岐、「大雀」は意富佐耶伎で「ササキ」が正しい。名義抄では「ササキ」で平安に至って濁音の位置が变化した(上代仮名遣の研究66ペ)とあるが、平安時代既に発音が不明となっていたとみてはいかが。

注6 拙考「古代のアクセント注記からみた古今和歌集解釈の諸問題」(国文学研究12輯)を参照されたい。

注7 「たぎつ」は終止形は上上平、連体形は上上上
注8 金田一京助博士に「樺校考(民間伝承)3の12。金田一博士喜寿記念「アイヌ語研究」に転載)がある。

注9 「国文学の文献学的研究152ペ」

注10 岩波文庫本430ペ

注11 「史学雜誌」大正9・3

注12 「大日経広大儀軌(延文二年(1070))」「金光明最勝王経首義(承暦三年(1079)書写)」「法華経单字(保延二年(1136)書写)」など。

紹介

金田一博士「アイヌ語研究」
喜寿記念

—金田一京助選集—

本書は金田一京助博士の喜寿を記念して刊行される選集三冊中の第一冊としてアイヌ語関係の論文のみを集めたものである。博士のアイヌ語に関する論文として最も早い「樺太アイヌの音韻組織」(人類学雑誌二七卷六・七・八号、明治四四年六・七・八月)から「樺校考」(民間伝承三卷一二月)から「民間伝承」(三卷一二月)号(昭和十三年八月)に至るまでの主要な論文十八編をのせている。

そのうち八編は「言語研究」(昭和八年

十一月刊)に再録されているが、それすら入手困難となった今日、アイヌ語研究の開拓者である博士の学的足跡をたどるのにはこの上ない書物と言えよう。

特に部立てはしていないが、全編は、内容的に分類編集されており、はじめの七編は純アイヌ語関係の論文である。

冒頭の「アイヌ語学講義」は、博士が「ユ一カラの研究」第二冊「虎杖丸の曲」(昭和六年刊)の訳注に添えられた「語法摘要」に、東大における講義をもとに新たに手を加えられたもので、量的にも本書の約半分を占め、アイヌ語研究を志すものにとつて、この上ない指針である。

なお、右の七編中には、博士の古稀記念の論文集「言語民俗論叢」(昭和二十八年刊)巻末の主要論著年表にもれた「教詞から見

たアイヌ民族」(日本民族、昭和一〇年十一月刊)所収)も収録されている。

次に国語とアイヌ語に系統関係のないことを論じた「国語とアイヌ語との関係」(日本文化史論集(昭和二十二年刊)所収)のほか、国語にはいつたアイヌ語を考証した論文六編があり、最後に、アイヌ語学史的観点から述べられた「チェンバリン先生とアイヌ語学」(国語と国文学)二巻四号昭和一〇年・四月)以下四編を添えている。

以上、いずれも該博な知識に加えるに流麗な筆致を以てする、博士ならではの論考ばかりであり、アイヌ語研究者にとつては勿論、国語学者にも裨益するところの大きい書と言えよう。(A5版・定価一〇〇〇円・昭和三五年五月・三省堂刊) (丁)